

## 医学教育に携わる者として

福島 菜奈恵

2019年3月に、信州大学医学部人体構造学教室の准教授から昇進し同教室教授に就任いたしました。大学院修了後に人体構造学教室の教員として採用されて以来、ずっと同じ場所で医学教育・医学研究に取り組んで参りましたが、これからもこのまま継続して教育・研究に携わることができるということは非常に幸運なことですし、周囲の方々からの御支援にとっても感謝しています。今後もこれまでの教育と研究を継続しつつ、将来に向けて発展させていければと考えております。

私が現在担当している教育科目の中で、最も多くの時間を占めているのが医学科の解剖学です。肉眼解剖実習が私の携わる主な医学教育の場となっています。解剖学実習は、医学科では2年次の前期に週3回、2時限から5時限まで行われており、医学科の講義・実習の中では非常に多くの時間数を有しています。実習では、「自分の体からしっかりと学んで欲しい」という献体者の意志を学生に伝えながら、学生と向き合い、充実した解剖学教育を行う努力をしてきました。実習で解剖させていただいている御遺体の提供者は、献体を希望され、信州大学医学部の篤志献体組織「信州大学こまくさ会」に生前に登録された方々です。亡くなられた後、御家族の同意を得て解剖させていただいております。人体構造学教室では、御遺体の御迎えから御遺族への対応、御遺体の防腐処置、御遺体の保存・管理、実習の準備および実習中の管理、納棺、火葬、御遺族への御遺骨の返還といった一連の解剖体関連業務を担当しており、私も技術職員と一緒にこの業務に従事しております。

現在、医師や歯科医師を養成する大学において教育として行われている解剖は、正常解剖（系統解剖）と言われているもので、身体の正常構造を明らかにするための解剖です。他に病理解剖と法理解剖がありますが、正常解剖に関しましては、実際に御遺体にメスを入れ切り開いて学ぶことが必要なのか、即ち、医学教育において解剖学実習は本当に必要なのか、という議論が存在します。医学教育の一環として解剖学実習を行うためには非常に時間も手間もかかりますので、効率が悪いと考えられる方も居られます。また、近年はバーチャルな教材も次々と開発されてきておりますので、わざわざ本物で実際に解剖する必要はないと考えられる方も居られます。ですが私は、実際に手を動かしながら、時間をかけて隅々まで解剖するという行為の必要性・重要性を忘れてはならないと思っています。解剖学実習は知識を得るためだけに行っているわけではなく、実際に解剖することによって初めて得られる倫理観といった、将来医療に携わる者にとって重要なことがあると思っています。また、実際に御遺体を解剖しながら構造物の境界・層構造について考え、悩みながら進めていく、その行為を通してこそ人体を構成する組織やその成り立ちについてじっくりと考えることができると思いますし、将

来、人を総合的に診ることができるようになるのではないのでしょうか。解剖学実習を通じて、医師として必要な「何が問題なのか？その問題に対して何をすればいいのか？」という能力が養われると私は信じています。医学の基礎知識として人体の構造を学ぶことが必要なことは言うまでもありませんが、そのためだけならば実際に解剖するという経験は必要ないかもしれません。ただそれ以上に、解剖学実習において自らの手で人間の体を解剖することによって、学生自身が御遺体と向き合い、考え、探求する事ができると思うのです。

解剖学実習は他の教育科目と比較すると非常に多くの時間がかかりますので、教員として医学生と接する時間も必然的に長くなります。解剖学の教員として医学生に接し、解剖学実習を通して学生一人一人の成長を身近に感じることができるということは、教員としての喜びであり、また教員であることの魅力であると思っています。しかし近年、基礎医学分野を志望する医学科卒業生が大幅に減少してきています。これは全国的な問題となっており、解剖学も例外ではありません。卒後臨床研修制度の導入が大きな要因と考えられておりますが、その他にも、大学のカリキュラム全体が臨床指向化していること、臨床医の専門医指向が高まっていることなどによって、基礎系大学院へ進学する医学科卒業生の減少や基礎系教室で一定期間研究に専念する臨床医の減少などが顕著となっています。また、教員の任期制の導入等、研究者という立場が不安定なものであると考える人も多く、生活が安定する臨床を志向するという事も考えられます。その結果、すでに全国的に基礎医学の専門教員不足が深刻化してきております。特に解剖学教室は教育負担が他の基礎分野に比べ非常に多い上に、もともと、教育と研究の両面を支えるだけの定員がない大学も多く、教育のみならず研究体制にも影響が出るといった悪循環に陥っています。現在多くの大学で、解剖学関連の教室員のほとんどが医学部や歯学部出身者ではなくなってきました。ひとつの対処方法として、医師や歯科医師ではない教員が医学生・歯学生にどのように教育を行えばいいのか、解剖学の教員としての教育方法を体系化しようという取り組みが解剖学会を中心に進められており、何とか解剖学教育を支えようとしています。ただ、このまま解剖学の専門教員がほとんどいなくなり、学生と同じ経験をしてきた医師や歯科医師による解剖学教育がなされないという状況は、大学としてどうなのか疑問に感じますし、少しでも医学部・歯学部出身の基礎医学教育者・研究者を増やしていかなければならないと思っています。今後も大多数の学生が臨床医になるという傾向は変わらないと思いますが、私は解剖学をはじめとする基礎医学に興味を持ち、基礎医学の道に進みたいという学生を、少しでも多く基礎医学教育者・研究者として育成したいという思いを持っています。学生と長時間にわたって向き合う解剖学の教員には、その役割を担う責任があると思いますし、より一層の努力が必要であると考えております。

(信州大学医学部人体構造学教室教授)